契（ちぎり）通信 VOL.82

２０１２年１０月２９日発行
株式会社チキリ　社長室編集

やっと秋めいてまいりました

昼間は少し汗ばむくらい気温が上がりますが、朝晩はかなり冷え込み、富士山も白いものがちらほら見えるようになって参りました。二十四節気の一つで、露が冷気によって霜となって降り始める頃を霜降（そうこう）と言うそうです。今年は１０月２３日で、この日から立冬までの間に吹く寒い北風を「木枯らし」と呼び、楓や蔦が紅葉し始めるんだそうです。秋も深まり、童謡「もみじ」♫秋の夕日に照る山もみじ～♪なんて、ちょっと歌いだしたくなるような感じです。

そして秋は、食欲の秋。読書の秋。運動の秋。何をやるにも良い季節です。来月の３日に沼津を流れる狩野川で、「ラブリバー狩野川」というイベントが開かれます。このイベントの一つに、一般市民から漕ぎ手を募り、市民ボート大会が企画されました。高校時代ボート部だった私は、週末この運営のお手伝いをしているのですが、何十年かぶりに、ボートに乗り川面に漕ぎ出すと、とても気持ちが良く、更に、先輩から命令され、何の責任も無く動き回っているのがとても心地良くて、時計が一気に逆回りして学生時代に戻った気がします。今秋は、地域振興も兼ねて、スポーツの秋堪能したいと思います。

代表取締役　服部厳一郎

なんだ・かんだ

◆　発見の１０の項目　◆

皆様ご存知だと思いますが、日経新聞の最終面に掲載されている「私の履歴書」というコラムがあり、政治、経済、科学、芸能他あらゆる部門で成功した方の自叙伝が書かれています。非常に感銘を受けることの多いコラムで、今月はノーベル化学賞を受賞した根岸英一教授が著者です。このコラムで根岸教授がかねてから唱えている「発見の１０の項目」に感銘を受けたので、一部新聞から抜粋してご紹介いたします。

発見の大前提には「何が欲しいか」という①願望と「何を必要とするか」という②ニーズがある。そしてそれを目指す③作戦あるいは計画を立てなければいけない。

発見に向けて最も大切な項目は、ブラウン教授（根岸教授が帝人を退職してパデュー大学博士研究員となったときの指導教授（1979 年ノーベル化学賞受賞））に学んだ④系統だった探索だ。先生の口癖は「大きな樫（かし）の木も小さなドングリから」。新たな研究の兆しを見つけた時、それをどうやって大きく広げていくかを、論理的で綿密に考えていた。実験も勘を頼りにするようなことはなく、系統的・網羅的な方法で追究していた。２人の研究者が同じ実験をしたのに違う結果が出たり、１人で同じ実験を繰り返して異なる結果が出たりした場合、ブラウン先生は「何が起きているかを正確に調べることが一番大切だ」と強調し「パラレル実験」を勧めた。これは結果が確定している実験と一つだけ条件を変えて行う実験のことだ。一見、手間がかかり遠回りしているようだが、実はこれが一番早い。新分野の開拓は、白い大きな紙に地図を書き込む作業に似ている。新たに判明した知識を書き加えていく際、失敗も重要な情報だ。そこが荒野だと分かれば地図の精度も高まる。ブラウン先生の系統的・網羅的な探索手法は、その作業に大いに役立つ。

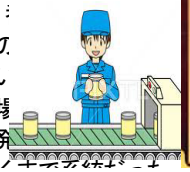
ただしこれを進めるためには、知性的な側面から３つの項目が欠かせない。⑤豊富な知識と⑥豊富なアイデア、そして⑦正確な判断だ。

アイデアは計画の実現のために特に重要だと考えている。少なくとも５～10 個、望ましくは 20～30 個のアイデアを持ち、最良と思われるものを検討すれば、よい結果に結びつく確率は高くなるはずだ。

知性面以外にも必要な条件が２つある。探索に向けた⑧意思力あるいは意欲と、探索をあきらめない⑨不屈の行動力だ。

実際に実験を始めると、上手く行く事は殆どない。では何回失敗を続けられるのか。私は思ったような結果が１カ月出なければ、一旦棚上げする方針を決めている。別のテー
敗した実験がだんだん客観的にとらえ
ら別のアイデアが浮かび、 再挑戦す

発見の条件の 10
ィピティ」だ。この
ても重要視されてい
に置いた。多くの場
ピティがなくとも発



チキリについて⑩

●　失敗した事業　●

３０年ほど前に製造業に進出しようとした事がありました。

当社のお客様で車のワイヤーハーネス（車内配線の束。電源供給や信号通信に用いられる複数の電線を束にして集合部品としたもの）を作っている会社があり、お取引きをさせて頂く中で、当社でワイヤーハーネスの組立をする事になりました。

沼津市の我入道に当社の倉庫があり、この倉庫をワイヤーハーネスの組立工場に改修して事業を始めました。名前は「株式会社服部製作所」当社から３人が出向し、パートの女性を募集して事業はスタートしました。

当初慣れない仕事で、３人は毎晩遅くまで働いて、何とか事業を軌道に乗せようと頑張りましたが、なかなか軌道になりませんでした。２年目に入っても厳しい状況が続き、その内、１人が結核に罹り入院。又一人も過労で倒れてしまい、事業継続が出来ない状態になってしまいました。結局この事業は、創業２年で頓挫し、やむなく廃業することとなりました。

当社８８年の歴史の中で、様々な新規事業に進出し、成功と失敗を繰り返してまいりましたが、失敗の中でもこの事業は特出すべきものです。

しかし、現在の当社があるのは、この様な新しい事への挑戦があったからこそだと思います。

■　清水町と災害時応援協定を締結　■

１０月１８日、当社の所在地である駿東郡清水町と、大規模災害時に町の復旧活動等に協力する「災害時応援協定」を結びました。

清水町役場の会議室で、町長・副町長御列席の中、当社の常時在庫品である、ワイヤロープ・合繊ロープ・ウインチその他重量物を動かしたり、固定したりする為に使う資材、また、車両の提供を、災害時の復旧活動において提供するという内容の契約書に、町長と署名捺印し調印式を行いました。清水町で協定を締結したのは、当社で３２社となるそうです。

協定は締結いたしましたが、当社の資材が役立つ状態は、それこそ、大変な事態になっているわけです。協定内容が実際に執行されるような事態にならないようにと考えています。

本レターのご提供に付きまして、ご不要・ご迷惑という方に付きましては、その旨ご一報頂きたいと思います。次回からの発送を中止させて頂きます。N